



月刊 第582号

寺泊名物蛸の土俵入

あけましておめでとうござい
ます。誌友の皆様にはご機嫌う
るわしく新玉の春をお迎えのこ
とと存じ上げます。

近頃雪国越後も雪のない正月
など珍らしくもないご時世で、

殊に海岸沿いの寺泊ではむしろ
雪のあるのが珍らしい程で、何
だか正月気分が出ない感じがす
るものの電線がびゅーびゅー鳴っ
て毎朝窓ガラスにびっしり雪が
張り付いて手をかじかませなが

ら雪除けをした時代を思えば無
い物ねだりと言うものでしよ
うか。
大晦日の寒混りの雨もあがっ
て晴れやかな元朝を迎えました。
一時途絶えた元旦マラソンも復
活して普段とひと味違う気分の
清冽な元旦の空気の中で互に新
年の挨拶を交し乍らのランニン
グは格別のようです。
扱ってここで年頭に当り寺泊の
話題にふれてみようと思いの
すが勿論長岡市への合併に向っ
て寺泊の位置づけがどのよう
なっているのか、合併新制長岡
市の中で唯一海と港と河口を有
する地域ですからその活用やら
何と言っても中心は商都長岡市
と新幹線、高速道路とのより効
率的なアクセス道路等々より発

展する寺泊地域として考えてゆ
かねばならぬ課題には事欠かぬ
ように思われます。
それに野積の市坂地区は急速
に観光関係の施設が整備されて
期待の地域なのですが愈々ここ
で温泉の掘さくが始まりました。
今は高度な地質調査を経ての本
さくとなるわけですからその可
能性は高く大いに期待される工
事です。弥彦山の向ふ側にはあ
れだけ豊富な温泉が噴出して
いるわけですから。
次は佐渡への高速船の就航で
しよ。六月から始まるダイヤ
がどのようになるのか、寺泊観
光の中で日本海遊覧コース、夕
日クルージング等々割引セッ
料金での活用など積極的に取り
組んでゆこうとする動きも始まっ

ているようでこれ又今後大いに
期待できる話題であろう。
荒れる日の多い季節であるが
時々めぐって行く風には遊漁船は
ヤリイカ釣りの季節を迎え又タ
コ漁が最盛期で漁のある日は百
ばい以上の大物が漁協の競場
勢揃いする。何しろタコは仲々
の曲者だから競りを待つ間は逃
げ出せないように網に入れられ
ているのだが、いよいよ競りの
出番となると競り場の真中に消
防ホースのような物で丸い土俵
が作られ水を撒いても土俵が清め
られ(吸い付いてもはがし易い
為の散水)次々と登上となる。
大物は二十キロ近いものもあり
まさに蛸の土俵入りである。競
り入は行司、仲買人は勝負審判
まさに寺泊名物蛸の土俵入。



荒ぶる海である。ざわざわと風がわたり始めたかと思う
と忽ち堤防に怒涛が吹き上げる。町の中までしぶきは飛
んでくる。



元旦マラソンは数年前から陸上競技協会の主催で再開。
まだ参加者は少ないが、速さよりも活性化が一番。



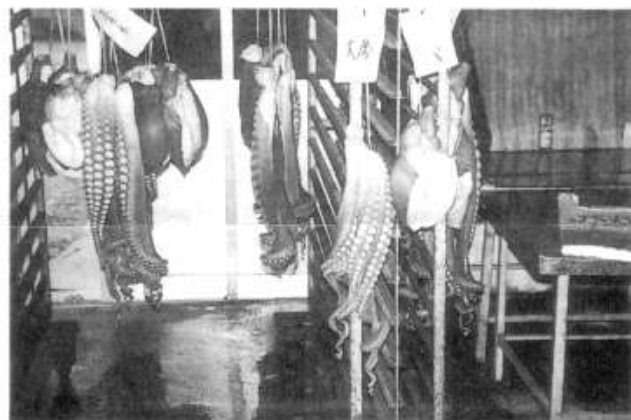
野積の一角に温泉掘さくをやぐらが立ち、町民の期待を
集めている。是非いいお湯が噴出して欲しいものである。
左手はホテル飛鳥。



閉じ込められた袋から開放されて堂々と土俵へ登陸である。蛸は愛敬があると同時に、ある風格も兼ね備えている。不思議な生きものである。



頭と足二本ずつに切り放されてゆで上げられる。足の先がくると巻き上がるのは鮮度と湯加減らしい。仲々神経の要る仕事。



出来上りと言うことになる。已に注文者の札が下がっている。蛸の臓物は珍味とされ、業者と観客にならないと仲々口へ入り難い。

東京寺泊会 創立50周年記念大会

期 日 平成17年2月6日(日曜日)
会 場 芝パークホテル別館2階 ローズの間
港区芝1-5-10
電話 03-3433-4141
受付は11時30分 12時 記念写真・祝宴
参加費 男性 12,000円 女性 11,000円
申 込 大田区本羽田1-21-4 三上喜久治
電 話 03-3744-2547
F A X 03-3744-2548

好色一代男(二)

さとうのぶひと

みなさん、明けましておめでと
うございます。今年もよろしく
お願いいたします。
さて、先月紹介した井原西鶴
の『好色一代男』、もう少し続
けます。
出雲崎から船宿の亭主に案内
され、北国の傾城町「寺泊」に
やって来た世之介は、京都の島
原や江戸の吉原に比べて寂しく
鄙びた遊郭の様子に興味をそそ
られます。遊里の本場では『色道』
の経験が積んだとはいえ、世之
介はまだ二十五歳、都会人の驕
り高ぶりは隠せません。
その頃の寺泊はどうだったの
でしょう? 青柳清作氏の『寺

泊の歴史』に登場する最初の
「村鑑帳」は、寛保二年(1742)
です。「村鑑帳」とは江戸
時代、村から領主へ提出され
た村の概要を記した帳面のこと
で、現代という国勢調査です。
村の石高、家数、人数、寺社な
どが記載され、十七世紀中頃か
ら広く作成されるようになりま
した。寛保二年、寺泊は柏崎陣
屋の支配に置かれていました。
この「村鑑帳」は、町年寄、大
肝煎の連名で柏崎陣屋に届け出
たものです。

それによれば家数五六七戸、
人口三二二〇です。酒造、男馬
と呼ばれる陸運業、回船と呼ば
れる海運業、柁屋、桶屋、鍛冶
屋などの産業が育ってきていま
すが、何と云っても海漁師が中
心で二六三戸(船の数が大小五
三艘)でした。白岩、野積、大
和田は入りませんが。従って、人
口三二二〇というのと当時として
は大集落でした。
しかし、『好色一代男』が刊
行されたのは天和二年(1682)
で、六〇年もの開きがありま
す。かなり割り引いて考えな
ければなりません。都市生活者
世之介の目に寺泊は、北国の鄙
びた漁師町と映りました。廓の
様子を世之介は語ります。

遊女たちは八月(陰曆)なの
にもう裕を着、縞模様なら袴だ
と思ひ込んでゐるらしく、みな
袖を着て、それに金糸入の襟を
かけています。帯は西陣織の金
欄の短いのを無理に後ろに結ん
でいます。素顔でも美しいのに
白粉を塗りこくり、額を丸く剃
り上げて生え際を墨で隈取って
います。髪は高くぐるぐる巻き
にして前髪を少し分け、水引で
結い添えています。
遊女たちは精一杯のお洒落を
しているのに、世之介はどこか
ちぐはぐなものを感じます。無
理をせずともありのままの方が
ずっと魅力的なのに、と言いた
そうです。
「よしあしのへだてもなく、五
匁づつに定め置くこと正直なれ」
遊女によしあしの区別はなく、
すべて揚げ代を五匁ずつに定め
てゐるのは正直なことです、と
言っています。モラル・エコ
ノミーの歯止めが効いていまし
た。(つづく)



町の寺ではそれぞれの形で年始会が催される。仲間に引き入れられそうになったが、車だったので涙を吞んで辞退。いささか心残り。(聖徳寺年始会)

平成十六年ふるさとだより会計報告

| 収入 | | 支出 | | 収入 | | 支出 | |
|----|----------|----------|-----|----------|----------|----|--|
| 1月 | 270,000円 | 180,435円 | 7月 | 65,000円 | 130,015円 | | |
| 2月 | 210,000円 | 145,315円 | 8月 | 218,000円 | 130,195円 | | |
| 3月 | 103,000円 | 145,495円 | 9月 | 43,000円 | 129,775円 | | |
| 4月 | 150,000円 | 115,205円 | 10月 | 120,000円 | 129,835円 | | |
| 5月 | 78,000円 | 129,355円 | 11月 | 64,000円 | 148,795円 | | |
| 6月 | 82,000円 | 181,475円 | 12月 | 206,000円 | 129,655円 | | |

誌代御後援(敬称略・順不同)

毎月掲載を以って領収に代えさせていただきます。今年(八六、五五〇)の赤字でしたが今までの積立分、一〇二、八二九(十二月末現在)で対応して参ります。一月二月六月十月の支出は東京会への出席、タックシール、封筒印刷等の費用でかさみました。ご不審の点は遠慮なくご照会下さい。

| | | | | | |
|-----|--------|------|-------|--------|------|
| 東京都 | 登石 記代 | 金五千元 | 朝霞市 | 藤田 伝治 | 金三千元 |
| 小平市 | 蒲田 ハル | 金三千元 | 坂戸市 | 阿部 正行 | 金三千元 |
| 群馬県 | 五十嵐 重尾 | 金三千元 | 高野 貞夫 | 金三千元 | |
| 折田 | 勝見フミイ | 金五千元 | 旭川市 | 外山 昌子 | 金五千元 |
| 加藤 | 小林 秀雄 | 金三千元 | 黒磯市 | 松尾 吉加 | 金五千元 |
| 久世 | 美寿子 | 金三千元 | 三条市 | 五十嵐 サト | 金五千元 |
| 忠司 | 秀雄 | 金三千元 | 長岡市 | 清水 與作 | 金五千元 |
| 敬子 | 忠司 | 金三千元 | 寺泊町 | 浄 願 寺 | 金一万元 |
| | | | 吉田町 | 小熊 欣治 | 金三千元 |
| | | | | 三 五 | 金三千元 |
| | | | | 江原 龍郎 | 金三千元 |
| | | | | 佐野 幸一郎 | 金三千元 |
| | | | | 京谷 ヨリ | 金三千元 |
| | | | | 中川 新平 | 金三千元 |
| | | | | 後藤 新平 | 金三千元 |
| | | | | あくや 米店 | 金三千元 |
| | | | | 五十嵐 屋 | 金三千元 |
| | | | | 倉井 政博 | 金三千元 |
| | | | | 山崎 順治 | 金三千元 |



町中で20ヶ所位の賽の神(ドンド焼き)が催される。この白岩地区では30年近い伝統がある。地区有志の主催で旧年のメ縄やダルマなどが燃やされる。(大宮さんによる神事)

| | | | | | |
|-----|-----|------|---------|----|------|
| 寺泊町 | 寺泊町 | 金三千元 | 古沢 | 久乃 | 金五千元 |
| | | | 住吉 | 勘一 | 金三千元 |
| | | | 観光センター | | 金五千元 |
| | | | 柳下 春雄 | | 金三千元 |
| | | | 宮村 利郎 | | 金三千元 |
| | | | 山沢 武男 | | 金三千元 |
| | | | 外山 忠義 | | 金三千元 |
| | | | 山内 義 | | 金三千元 |
| | | | 竹内 武男 | | 金三千元 |
| | | | 山内 武男 | | 金三千元 |
| | | | 田村 洋品店 | | 金三千元 |
| | | | マ ス ツ ネ | | 金五千元 |
| | | | て ん や | | 金三千元 |
| | | | 小田野 喜知 | | 金五千元 |
| | | | 大 三 庄 | | 金三千元 |
| | | | 渡辺 美隆 | | 金三千元 |
| | | | 当 銀 二 良 | | 金三千元 |
| | | | 白 神 根 屋 | | 金三千元 |
| | | | 赤 藤 左 門 | | 金三千元 |
| | | | 齊 藤 枝 | | 金三千元 |
| | | | 川 合 静香 | | 金三千元 |



燃えさかる港町の賽の神。あいにくの寒の降りしき中であつたが、30人程が集り炎の中へ竹に吊した餅やスルメをかざす。

| | | | | |
|-----|-----|------|---------|------|
| 寺泊町 | 寺泊町 | 金三千元 | 久乃 | 金五千元 |
| | | | 住吉 | 金三千元 |
| | | | 観光センター | 金五千元 |
| | | | 柳下 春雄 | 金三千元 |
| | | | 宮村 利郎 | 金三千元 |
| | | | 山沢 武男 | 金三千元 |
| | | | 外山 忠義 | 金三千元 |
| | | | 山内 義 | 金三千元 |
| | | | 竹内 武男 | 金三千元 |
| | | | 山内 武男 | 金三千元 |
| | | | 田村 洋品店 | 金三千元 |
| | | | マ ス ツ ネ | 金五千元 |
| | | | て ん や | 金三千元 |
| | | | 小田野 喜知 | 金五千元 |
| | | | 大 三 庄 | 金三千元 |
| | | | 渡辺 美隆 | 金三千元 |
| | | | 当 銀 二 良 | 金三千元 |
| | | | 白 神 根 屋 | 金三千元 |
| | | | 赤 藤 左 門 | 金三千元 |
| | | | 齊 藤 枝 | 金三千元 |
| | | | 川 合 静香 | 金三千元 |

小波会新春句会詠草

兼題 初空・干菜他当季

荒海も

放射冷却初御空

水沢 蕉子

初空や

肩車され大はしやぎ

江原 汀子

初御空

越に聳える大鳥居

外山きよし

初空に

木立の梢の輝やけり

斉藤 紫苑

マラソンを

する人見る人初御空

内藤 蓮子



新年を迎える大宮の鳥居のメ縄はその年の本厄一同の寄進がしきたり。

今年は昭和39年、40年生れが担当。(16年12月)

菜を干すと

いふ事知らず古希過ぐる

小形 美代

妻入りに

干菜連ねて漁師町

大越碧水子

干菜吊る

軒下風の通り道

外山 海子

ちらははの

おもだち浮かぶ干菜汁

小島 冬扇

洋服の

ハンガーに懸け菜を干せる

小島 温石

蛸を採る

ことも生業初船出

加勢 白汀



蒲原平野から望む弥彦・角田の両山は広々と裾野を拡げている。

左手の山は良寛さま由緒の国上山。

天災の

あとの今年の出初式

竹内 霍山

反骨を

形に見せてるふところ手

能登 頑牛

酔ひ醒めの

水一息に寒の月

中村 流瓢

あ тогоき

みなひとしく気持の切り換えを念じながら迎えた新年である。が忽ち二十日大寒を明日迎える。久々にひっそりと雪化粧の中ので迎える大晦日かと思っていたが雪は前日であがってしかも二年参りに出掛ける頃には晴れていたのに途中から寒まじりの雨

にたたられてびしょ濡れの除夜の鐘、二年参りとなった。お天気のせいばかりでなく町は人通りがなくひっそりとしてやはり災害の後遺症が後を引いて出歩く気分になれないのだから。七草、十一日の鏡開き、十四日からの小正月、賽の神、四日、二十日正月とつづくのだが三ヶ日が過ぎると正月気分などどこへやら、いや三ヶ日さえかかっての晴れやかな、日常から開放されたのんびり気分が残念乍ら感じられないご事世が淋しい。夜な夜な知人宅を廻ってのカルタ取り、ドビンチャピン、ゼスチャーゲーム等時には明け方まで大っぴらに門限なし、暖房も炬燵か手あぶり茶菓もまま



厳しい冬の海へはチェックのネルの一枚布での頬被り(中東の被りものに似ている)か目出し帽。顔まで出て目出し帽とはこれいかに。「息をし易いように引っ張ったら伸びたんだてば」名答なり。

ならぬ中で、だが楽しく活気に溢れて充実感に満ちていたあの正月は何処へ消えてしまったのだろうか。今年(16年)は東京寺泊会創立五十周年の記念大会、盛会を念ずると共に楽しみにしている。

毎月二十日発行

寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

発行所 新 潟 県 寺 泊 町

ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 〇二二九番

振替番号 〇〇六〇〇三二九番
印刷所 吉野印刷株式会社